

星の王子さま (Apprivoiser アプリボワゼ 時間をかけてできたきずな)

サン・テグジュペリ作 内藤濯訳 (岩波書店)

ところが、ある日の朝、ちょうどお日さまが昇るころ、花は、とうとう顔を見せました。(p 44)

なにひとつ手おちなく化粧をこらした花は、あくびをしながらいいました。

「ああ、まだ眠いわ……。あら、ごめんなさい。あたくし、まだ髪をといていませんから……」

王子さまは、そういわれて、「ああ、美しい花だ」と思わずにはいられませんでした。

「きれいだなあ!」「そうでしょうか」花はしずかに答えました。「あたくし、お日さまとっしよに、生まれたんですわ」王子さまは、この花、あんまり謙虚ではないな、と思いましたが、でも、ホロリとするほど美しい花でした。

「いま、朝のお食事の時刻ですわね。あたくしにも、なにか、いただきさせてくれないの?……」

王子さまは、どぎまぎしましたが、汲みたての水のはいったジョロをとりにいって、花に、朝の

食事をさせてやりました。花は、咲いたかと思うとすぐ、自分の美しさを鼻にかけて、王子さまを苦しめはじめました。それで、王子さまはたいへん困りました。たとえばある日のこと、花は、そのもっている四つのトゲの話をしながらか、王子さまにむかって、こういいました。「爪をひっかけにくるかもしれませんわね、トラたちが！」「ぼくの星に、トラなんかいないよ。それに、トラは草なんかたべないからね」と王子さまは、相手をさえぎっていいました。

「あたくし、草じゃありませんのよ」と花は、あまったるい声で答えました。「あ、ごめんね……」

「あたくし、トラなんか、ちっともこわくないんですけど、風の吹いてくるのが、こわいわ。ついたてを、なんとかしてくださらない？」<風の吹いてくるのがこわいなんて……植物なのに、どうしたんだろう。この花ったら、ずいぶん気むずかしいなあ……>と王子さまは考えました。

「夕方になったら、覆いガラスをかけてくださいね。ここ、とても寒いわ。星のあり場が悪いんですわね。だけど、あたくしのもといた国では……」

花は、こういいかけて口をつぐみました。もといたといっても、花がいたのではなくて、種がい

たのでした。ですから、ほかの世界のことなんか、知っているはずがありません。思わず、こんなすぐばれそうなウソをいいかけたのが恥ずかしくなって、花は、王子さまをごまかそうと、二、三度せきをしました。「ついたては、どうなすったの？・・・」「とりにいきかけたら、きみが、なんとかいったものだから」すると花は、無理にせきをして、王子さまを、すまない気もちにさせました。そんなしうちをされて、本気で花を愛してはいたのですが、すぐに花のころをうたがうようになりました。花がなんでもなく言ったことを、まじめにうけて、王子さまは、なさけなくなりました。

ある日、王子さまは、ぼくに心をうちあけていいました。

「あの花のいうことなんか、聞いてはいけなかったんだよ。人間は、花のいうことなんていいかげんに聞いてればいいんだよ。花はながめるものだよ。においをかぐものだよ。ぼくの花は、ぼくの星をいいにおいにしてたけど、ぼくは、すこしも楽しくなかった。あの爪の話だって、ぼく、きいていて、じっとしてられなかったんだ。だから、かわいそうに思うのが、あたりまえだったんだ

けどね……」

それからまた、こうも、うちあけていました。

「ぼくは、あの時、なんにもわからなかったんだ。あの花のいうことなんか、とりあげずに、することで品定めしなけりゃ、いけなかったんだ。ぼくは、あの花のおかげで、いいにおいにつつまれていたし、明るい光の中にいたんだ。だから、ぼくは、どんなことになっても、花から逃げたりしちゃいけなかったんだ。ずるそうなふるまいはしているけど、根は、やさしいんだということを見とらなきゃいけなかったんだ。花のすることったら、ほんとに、とんちんかんなんだから。だけど、ぼくは、あんまり小さかったから、あの花を愛してるってことが、わからなかったんだ」 (p 48)

王子さまは、つい、このごろ生えたバオバブの芽を、どこか顔をくもらせて、ぬき取りました。もう、二度と帰ってこないつもりだったのです。ところで、いつもするそんな仕事も、その朝は、ほんとに身にしみました。そして、わかれのしるしに、花に水をかけて、覆いガラスを、かけてや

ろうとしていると、王子さまは、今にも涙がこぼれそうになりました。「さよなら」と、王子さまは花にいいました。しかし、花はなんともいいません。「さよなら」と、王子さまはくりかえしました。花は、せきをしました。でも、かぜをひいているからではありませんでした。

「あたくし、ばかでした」と、花は、やっと、王子さまにいいました。「ごめんなさい。おしあわせでね……」王子さまは、花がちっともとがめるようなことをいわないので、おどろきました。そして、覆いガラスを空に向けたまま、すっかりめんくらって、じっと立っていました。花がどうして、こうおとなしくしているのか、わけがわかりませんでした。「そりゃあ、もう、あたくし、あなたが好きなんです。あなたがそれを、ちっとも知らなかったのは、あたくしがわるかったんです。でも、そんなこと、どうでもいいことですわ。あたくしもそうでしたけど、あなたもやっぱり、おばかさんだったのよ。おしあわせでね……。もう、その覆いガラスなんか、いりませんわ」

「でも、風が吹いてきたら……」「あたくしの風、たいした風じゃありませんもの……夜のすずしい風に吹かれたら、さっぱりしますわ……花なんですもの」「でも、けものが……」

「あたくし、チョウチョウのお友だちになりたかったら、二匹や三匹のケムシはがまんしなくちゃあね。チョウチョウって、なんだか、たいそう美しそうですわ。チョウチョウでなくて、だれが、あたくしをたずねにきてくれるでしょう。あなたは、遠くにいておしまいですからね。大きなけものことだったら、ちっともこわかないわ。あたくしだって、爪はもっているんだから」

花は、そうって四つのトゲを、むじゃきに見せたあと、こうつけ加えました。

「そう、ぐずぐずなさるなんて、じれったいわ。もうよそに行くことにおきめになったんだから、いっておしまいなさい、さっさと！」花がそういったのは、泣いている顔を、王子さまに見せたくなかったからでした。それほど弱みを見せるのがきらいな花でした。(p 52)

.....

「だけど、はかないって、なんのこと？」(p 80)

一度なにか聞きだすと、しまいまできかずにはいられない王子さまが、くりかえしました。

「そりゃ、＜そのうち消えてなくなる＞っていう意味だよ」「ぼくの花、そのうち消えてなくなる

の？」「うん、そうだとも」ぼくの花は、はなかい花なのか。身のまもりといたら、四つのトゲしか持っていない。それなのに、ぼくはあの花をあの星にひとりぼっちにしてきたんだ！と王子さまは考えました。王子さまは、はじめて、あの花がなつかしくなりました。それでも、元気をとりもどして聞きました。「ぼく、こんどは、どこの星を見物したら、いいでしょうかね」

「地球の見物をしなさい。なかなか評判のいい星だ・・・」と、地理学者が答えました。

王子さまは、遠くに残してきた花のことを考えながら、そこを出かけました。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ところで、王子さまが、砂原と、岩と雪をふみわけて、長いこと歩いていますと、やっと、一本の道を見つけました。道というものは、みな、ひとのいるところへ、通じているのです。

「こんにちは」と、王子さまがいました。そこは、バラの花の咲きそろっている庭でした。

「こんにちは」と、バラの花たちがいました。王子さまは、バラの花をながめました。花がみな、遠くに残してきた花に似ているのです。「あんたたち、だれ？」と、王子さまは、びっくりしてきき

ました。「あたくしたち、バラの花ですわ」と、バラの花たちがいいました。

「ああ、そうか……」そういった王子さまは、たいへんさびしい気持ちになりました。考えると、遠くに残してきた花は、自分のような花は、世界のどこにもない、といったものでした。それなのに、どうでしょう。見ると、たった一つの庭に、そっくりそのままの花が、5千ほどもあるのです。王子さまは考えました。「もし、あの花が、このありさまを見たら、さぞこまるだろう……やたらせきをして、ひとに笑われまいと、死んだふりをするだろう。そしたら、ぼくは、あの花を介抱するふりをしなければなくなるだろう。だって、そうしなかったら、ぼくをひどいめにあわそうと思って、ほんとうに死んでしまうだろう……」それから、王子さまは、また、こうも考えました。「ぼくは、この世に、たった一つという、めずらしい花をもっているつもりだった。ところが、じつは、あたりまえのバラの花を、一つ持っているきりだった。あれと、ひざの高さしかない三つの火山—火山も一つは、どうかすると、いつまでも火をふかないかもしれない—ぼくはこれじゃ、えらい王さまなんかになれようがない……」王子さまは、草の上につっぷして泣きました。



(p 9 2)

.....

「ちがう、友だちをさがしているんだよ。＜アプリボワゼ 飼いならす＞って、それ、なんのこと  
だい？」(p 9 4)

「よく忘れられていることだがね。＜仲よくなる＞っていうことさ」「仲よくなる？」

「うん、そうだとも。おれの中から見ると、あんたは、まだ、いまじゃ、ほかの十万もの男の子と、  
べつに変わらない男の子なのさ。だから、おれは、あんたがいなくたっていいんだ。あんたもやっ  
ぱり、おれがいなくたっていいんだ。あんたの中から見ると、おれは、十万ものキツネと同じなん  
だ。だけど、あんたがおれを飼いならすと、おれたちは、もう、おたがいに、はなれちゃいられな  
くなるよ。あんたは、おれにとって、この世でたったひとりの人になるし、おれは、あんたにとっ  
て、かけがいのないものになるんだよ……」と、キツネがいました。「なんだか、話がわかり  
かけたようだね」と、王子さまがいました。「花が一つあってね……。その花が、ぼくになつ

いていたようだけど……」「かもしれないな。地球の上にゃ、いろんなことがあるんでねえ……」

と、キツネがいました。「地球の上の話してるんじゃないんだよ」と、王子さまがいました。

すると、キツネは王子さまの話に、たいそう引きこまれたようすでした。「ほかの星の上での話しかい？」「うん」「その星の上にゃ、狩人がいるかい？」「いないよ、そんな人」「そいつあ、おもしろいね。じゃ、ニワトリは？」「いないよ、そんなもの」「いや、どうも思いどおりにゃ、いかないもんだなあ」といって、キツネは、ため息をつきました。でも、キツネは、また、話をもとにもどしました。「おれ、毎日おなじこととして暮らしているよ。おれがニワトリをおっかけると、人間のやつが、おれをおっかける。ニワトリがみんな似たりよったりなら、人間のやつが、またみんな似たりよったりなんだから、おれは、少々退屈しているよ。だけど、もし、あんたが、おれと仲良くしてくれたら、おれは、お日さまにあたったような気持ちになって、暮らしてゆけるんだ。足音だって、今日まで聞いてきたのとは、違ったのが聞けるんだ。ほかの足音がすると、おれは、穴の中にすっこんでしまう。でも、あんたの足音がすると、おれは、音楽でも聴いている気持ちになって、穴の

外にはいだすだろうね。それから、あれ、見なさい。あの向こうに見える麦畑はどうだね。おれは、パンなんか食やしない。麦なんて、なんにもなりやしない。だから麦畑なんか見たところで、思い出すことって、なんにもありやしない。それどころか、おれはあれを見ると、気がふさぐんだ。だけど、あんたのその金色の髪は美しいなあ。あんたがおれと仲良くしてくれたら、おれにや、そいつが、すばらしいものに見えるだろう。金色の麦をみると、あんたを思い出すだろうな。それに、麦を吹く風の音も、おれにやうれしいだろうな」(p 97) . . . . .

王子さまは、もう一度バラの花を見に行きました。そして、こういいました。(p 101)

「あんたたち、ぼくのバラの花とはまるっきりちがうよ。それじゃ、ただ咲いているだけじゃないか。だあれも、あんたたちとは仲良くしなかったし、あんたたちのほうでも、だれとも仲良くしなかったんだからね。ぼくがはじめて出くわした時分のキツネとおんなじさ。あのキツネは、はじめ、十万のキツネとおんなじだった。だけど、いまじゃ、もう、ぼくの友達になってるんだから、この世にたった一匹しかいないキツネなんだよ」そういわれて、バラの花たちは、たいそうきまりわる

がりました。「あなたたちは美しいけれど、ただ咲いているだけなんだね。あなたたちのためには、死ぬ気になんかなれないよ。そりゃ、ぼくのバラの花も、なんでもなく、そばを通過してゆく人が見たら、あなたたちとおんなじ花だと思えるかもしれない。だけど、あの一輪の花が、ぼくには、あなたたちみんなよりも、大切なんだ。だって、ぼくが水をかけた花なんだからね。覆いガラスもかけてやったんだからね。ついでで、風にあたらないようにしてやったんだからね。ケムシを殺してやった花なんだからね。不平もきいてやったし、じまん話も聞いてやったし、だまっているならいゝので、時には、どうしたのだろうと、聞き耳をたててやった花なんだからね。ぼくのものになった花なんだからね」

バラの花たちにこういって、王子さまは、キツネのところにもどってきました。「じゃ、さよなら」と、王子さまはいいました。「さよなら」と、キツネはいいました。「さっきの秘密をいおうかね。なに、なんでもないことだよ。心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ」「かんじんなことは、目には見えない」と、王子さまは、忘れないよ

うにくりかえしました。「あんたが、あんたのバラの花をととても大切に思ってるのはね、そのバラの花のために、ひまつぶしたからだよ」「ぼくが、ぼくのバラを、とても大切に思ってるのは……」と、王子さまは、忘れないようにいいました。

「人間っていうものは、この大切なことを忘れてるんだよ。だけど、あんたは、このことを忘れちゃいけない。めんどろみたあいてには、いつまでも責任があるんだ。守らなきゃならないんだよ、バラの花との約束をね……」と、キツネはいいました。(p 103)

.....

「ねえ……ぼくの花……ぼく、あの花にしてやらなくちゃならないことがあるんだ。ほんとに弱い花なんだよ。ほんとに無邪気な花なんだよ。身の守りといったら、四つのちっぽけなトゲしか、持っていない花なんだよ……」(p 129)











